吉村美栄子知事

知事インタビュー ◎聞き手 梶本久夫 本誌発行人

心の通う温かい県政を

県民が一生を過ごしたいと思える山形をめざして

山形県県知事
吉村美栄子さん

◎プロフィール
1951年　山形県生まれ
1974年　お茶の水女子大学卒業
1974年　株式会社リクルート入社
1981年　行政書士の資格を取得
1998年　山形市総合学習センター勤務
2000年　自宅で行政書士を開業
山形県教育委員会、山形県入札監視委員会、山形市個人情報保護制度運営審議会などの委員を歴任
2009年より現職

―4月より新年度がスタートしました。未曾有の経済危機が叫ばれる中、知事はどのような姿勢で県政運営に臨まれますか。

吉村―喫緊の課題としては、雇用情勢の悪化に歯止めを掛けないといけません。平成21年2月の時点で、山形県の有効求人倍率は0・39倍。職を求めて県外へ出ていかれる方々も年々増加しています。選挙のときから私は、県民の生命（いのち）と生活を守るのが行政の一番大事な役割だと申し上げてきました。そのために必要な施策が必要とする方のお手元にきちんと届くような県政をめざしていきます。

県民の方々との「対話」を県政運営の基本としながら、新年度から ①県内産業の振興と活性化 ②農業の再生 ③医療、福祉、子育て支援の充実 ④教育の振興という4つの分野に特に重点的に取組んでいきます。

―知事の掲げる「心の通う温かい県政の実現」に向けて、非常に重要だと思われる医療、福祉、子育て支援の充実についてお聞かせください。

吉村―私は山形県で生まれて、山形県で育ちました。「山形で暮らして良かった」「山形に骨を埋めたい」、県民がそのような一生を過ごしてもいいと感じられるような環境づくりがとても大事だと思います。また、対話を重視し、「赤ちゃんから長寿の方まで生き生きと暮らせる山形」の実現をめざしていきたいと思っています。

「子育て」についてですが、子どもを安心して産み、育てられる社会をつくるには、先に述べた雇用の問題を解決することが非常に重要です。生活が成り立たないと、結婚も考えにくいのではないでしょうか。全国では上昇に転じている合計特殊出生率も、本県では減少し続けています。子どもの少ない社会は元気がありません。ですから、行政の側でできる限りの支援をしていきたいと考えています。

行政からの支援策として、4月から知事直轄の「子ども政策室」を新設しました。拠点を設けることで、今までさまざまな部にまたがっていた子どもに関する政策を一体的、横断的に進めることができるようになります。トップとなる子ども政策監には、部長級ポストでは県政史上初となる女性職員を起用しました。子育ての経験があり、なおかつ働く女性としての視点からの子育て世代への支援を期待しています。

それから長寿の方の知識や経験を県政運営に生かす、「知恵袋委員会」の設置を公約のひとつとして掲げてきました。年を取られた方が必ず医師や施設のお世話になっているわけではなく、元気な方々はたくさんいらっしゃいます。彼らの持っている豊富な知識や経験、そして元気をどんどん社会に発信してもらいたいです。

―教育について知事のお考えをお聞かせください。

吉村―4月から中学2年の少人数学級が、県内8校でスタートします。段階的に拡充し、最終的には中学3年生まで完全実施するという方向で考えています。中学校1、2年というのは第2次反抗期の真っただ中。そういう精神的にも不安定な時期に先生方が生徒一人ひとりと交流ができるような環境がとても大切です。また、私立学校の支援拡充、特別支援学校等の機能強化、生涯学習の充実などにも力を入れていきたいと思います。

―4つの分野以外に力を入れたい施策について教えてください。

吉村―「子育て」「教育」も含まれる、人づくりが非常に重要だと思います。特に県内全域から若者が集いあって、刺激を与え合うような地域リーダーを養成する事業なども構想しています。人と人との交流の中で育まれる心の部分はすごく大事です。

私が思いますに、戦後教育の中で足りない部分のひとつは公共心ではないでしょうか。これは決して自分を犠牲にしろと言っているわけではなく、自分のことも半分、社会のことも半分考えたらどうだろうかということです。自分のことも大事だけど、社会のことも考えることができるような若者をどんどん増やしていけたらなと思っています。

大河ドラマ「天地人」、映画「おくりびと」を契機とした観光誘客を推進。写真は、天地人博2009（平成21. 1.24～22.1.11）の様子

平成22年デビューする米の新品種の名称は「つや姫」に決定。今後は、「つや姫」をリード役とした県産米全体の評価向上をめざす

「子育て支援医療給付制度」の創設、保育サービスの充実、「子ども政策室」の設置等により、子育て支援を充実。写真は、高校生の子育て体験事業の様子

全国に先駆けて本県が導入した少人数学級編成の中学3年生までの段階的拡充、特色ある教育の推進により、「教育県やまがた」の復活を図る。写真は、小学校外国語活動授業に中学校教員が協力する小中学校連携の様子